

論文提出者氏名 金子美都子

金子美都子氏の「フランスにおける日本古典詩歌受容と20世紀日仏文化—交差と融合」は、フランスにおける日本古典詩歌理解、なかでも俳諧（俳句）の受容を、美術におけるジャポニズムの動きを視野に収めながら、20世紀前半のフランス文学の文脈に位置づけてつ、数々の歴史的資料を発掘した労作である。

本論文は、三部に分かれる全十章の本文、および序章と終章からなる。以下、論文の構成にしたがって、内容の概略を記す。

第Ⅰ部「日仏修好の黎明とフランスにおける日本古典詩歌の翻訳」には三章を収める。第一章「レオン・ド・ロニーと日本古典詩歌紹介・翻訳—美術のジャポニズムを通過して」は、1871年に日本詩歌の初の仏訳として出版された『詩歌撰集』*Anthologie japonaise*の歴史的意義を19世紀の日本学の文脈のなかに位置づける。フランスにおける日本語教育の草分け的存在でもあるロニーは、日本詩歌の特徴を簡潔性と暗示性と捉えていたことが指摘される。第二章「短歌の試作—ジュディット・ゴーチエ『蜻蛉集』」は、ジュディット・ゴーチエが西園寺公望の協力を得て1885年に出版した和歌の仏訳詩集『蜻蛉集』*Poèmes de la libellule*を取りあげる。金子氏は『蜻蛉集』に関する先行研究を整理した上で、具体的な個々の翻訳を詩法の面から検討し、「梅」や「蜻蛉」のイメージの扱い方に論及する。第三章「日本美術受容のなかの日本古典詩歌」は、美術におけるジャポニズムとフランスにおける日本詩歌に対する関心との結びつきを、エルネスト・シェノー、フィリップ・ビュルティエ、ゴンクール兄弟らを取り上げて考察する。シェノーは北斎や日本の昔話に着目して日本人の国民性を論じ、ビュルティエはこれらに加えて日本詩歌にも視野を広げてジャポニズムを推し進める。ゴンクール兄弟は異国情緒への嗜好から出発して日本の美意識への鋭い感性を養った。そのような見通しのなかで、ジャポニズムによって捉えられた日本文化の特質は非対称性、生の原則、創意であったとするのである。

第Ⅱ部「アジアへの覚醒—ポール＝ルイ・クーシュー」には二章を収める。第四章「俳句と日本文化翻訳の先駆者—ポール＝ルイ・クーシュー」は、アルベール・カーン基金の給費生として来日し、日本文学・文化論『アジアの詩人と賢人』*Sages et poètes d'Asie* (1916年)を著すとともに、みずからフランス語による創作ハイカイ（俳諧）を試みたポール＝ルイ・クーシューについて、その俳句（俳諧）理解を問う。金子氏はバジル・ホール・チェンバレン、クロード・ウジェーヌ・メートルらと対照させつつ、一瞬の驚きを省略に満ちた統辞法のうちに表現する俳句に、クーシューが近代性をみていたとする。また三行で構成されるクーシューの翻訳は、俳句の断片性、瞬時性、未完性を強調しているとする。クーシューは、俳句にとどまらず広く日本文化の特質を見すえようとする姿勢を持っており、20世紀はじめの日仏文化交流の文脈における興味深い例を提供することが確認される。第五章「新詩「ハイカイ」の創始」は、クーシューの句集『水の流れに沿って』*Au fil de l'eau*を取り上げ、芭蕉の句などとの比較を通じ、クーシューのハイカイにおける体言の強調を詩法として論じる。

第Ⅲ部「新しい詩と詩歌の受容—戦禍とフランス・ハイカイ」には、残る五章を収める。第六章「サンボリスムの危機—フェルナン・グレッグと『レ・レットル』誌」は、1904年にクーシューの俳句紹介記事を掲載した『レ・レットル』*Les Lettres*誌が、そもそもいかなる雑誌であったかを明らかにし、主宰者であったフェルナン・グレッグの詩人としての仕事を論じる。象徴主義以来のフランス詩の伝統に行き詰まりを見たグレッグは、俳句の

簡潔さのうちに芸術が人間と生に立ち戻る手がかりを認め、みずからハイカイ風の四行詩を数多く残した。クーシューの俳句翻訳が三行詩であったのに対し、グレッグの四行詩はフランスのハイカイのもう一つの型を提供したのである。第七章「塹壕—瞬間の「生」と絶え間なく続く命の讃歌」は、世界大戦の塹壕戦を歩兵として戦い、その経験を三行詩に書き綴ったジュリアン・ヴォカンスを論じる。近年再評価の動きがあるヴォカンスは、クーシューを通じて俳句を知り、1916年に「戦争百景」*Cent visions de guerre*を発表した。これにジャン・ポーランが着目し、1920年、*NRF*誌がハイカイ詩を掲載する。そのような動きを三者のあいだに取り交わされた書簡の紹介を織り交ぜつつ辿る。ヴォカンスのハイカイ観とその詩法が、ハイカイに対し概して冷淡な反応を示したフランス詩壇と関連づけられながら論じられ、ヴォカンスの三行詩への執着が伝統への反逆と前衛への志向にあったことが指摘される。第八章「戦禍の街ランス 20年代と新しいサンシビリテールネ・モーブラン」は、1923年、ランスで刊行された『ル・パンプリ』*Le Pampre*誌の特集「フランスのハイカイ：書誌と詞華集」*Le Haïkai français: bibliographie et anthologie*と、選者ルネ・モーブランを取り上げる。俳句に簡潔さへの愛を認め、現代の感性の探究としてハイカイに向きあったモーブランの選による多くのハイカイ作品が引用され、作者たちや作品成立の事情が紹介される。なお、モーブランは高濱虚子の滞仏時に虚子と面会しており、自撰集『ハイカイ百選』*Cent haïkai*に収められた作品のうち40篇は堀口大學によって訳出され、1925年8月の『明星』に掲載された。第九章「『リテラチュール』誌からシュールレアリスムへ—ポール・エリュアールと「ここで生きるために」」は、ポール・エリュアールとハイカイとの関わりを探る。エリュアールはジャン・ポーランを通じてジュリアン・ヴォカンスとそのハイカイ作品を知った。金子氏によれば、エリュアールのハイカイ制作は、ヴォカンスの存在と、アンドレ・ブルトン、フィリップ・スーポー、ルイ・アラゴンらによる『リテラチュール』*Littérature*誌創刊の動きのなかに位置づけられる。つまりフランス詩におけるダダやシュールレアリスムの精神とハイカイとの近似性が指摘されるのである。この上で、九章の後半でエリュアールの詩篇「ここで生きるために」*Pour vivre ici*が取り上げられ、作品にみられる技法が俳諧の詩法との対比において分析される。第十章「日本古典詩歌と日仏の文化交流—松尾邦之助、キク・ヤマタ、堀口大學、高濱虚子」では、20世紀の日仏文化交流に関わる事実が補足される。『フランス・ジャポン』*France-Japon*の編集長であった松尾邦之助、『日本の唇に載せて』*Sur des lèvres japonaises*を著したキク・ヤマタ、さらには堀口大學、高濱虚子らの仕事が、フランスにおける日本古典文学の文脈で歴史的に辿られるのである。

以上のようにまとめられる本論にたいし、審査委員からは、金子氏がフランス・ハイカイ等に関する多くの資料を新たに発掘し、書誌学的にも貴重な貢献をなした点について高く評価する意見があった。また、クーシューの仕事がフランスの詩の歴史のなかに残した波紋の拡がりをも的確に指摘した点、エリュアールとハイカイの結びつきという視点を提供した点など、本論の功績は大きいと判断される。詩人たちの伝記的事実の確認からはじめてテキストの詩学的分析にいたる正統的な手続きにも好感が寄せられた。一方で、わずか一年足らず日本に滞在したに過ぎないクーシューの日本語力について裏付けが得られないこと、クーシューの俳句（俳諧）理解の経路が必ずしも実証的にたどれないことなどが今後の課題として指摘された。また、フランス・俳諧の詩法的分析のうちに再考の余地のある点が含まれることも審査委員からの疑問点として挙げられた。ただし、これらは本論の学術的価値を本質において損なうものではない。

以上の判断により、本審査委員会は、金子美都子氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。